

「『孫子』の構造と編纂過程」

石井 真美子

この論文は、現存する中国最古の兵書『孫子』の一編纂過程の解明を試みるものである。

『孫子』十三篇は春秋時代末期の呉王闔廬（在位 紀元前514年—496年）に仕えた孫武の著書だといわれている。以来、『漢書』芸文志をはじめとした歴代の著録にその書名が見られ、現代にいたっても広く愛読されている。現行本十三篇の体裁及び内容は、整備され首尾一貫しているものだと評価されてきた。しかし、果たして『孫子』は本当に整備された書だといえるのだろうか。先秦の諸子書が後学の手によるもので、多くの編纂過程を経たものであることは現在定説となっており、『孫子』も例外ではないはずである。実際に現行本の『孫子』十三篇を通読してみると、全体としては主旨が一貫しているようだが雑然としており、その構造に問題があるように思われる。しかし、これまでの『孫子』に対する研究を概観してみると、成立時期や著者についての論争は多いが、全体の構造について言及したものは少ない。錯簡説も出されてはいるが、それも一部の文に対してのみである。そこでこの論文では1972年に銀雀山漢墓から出土した竹簡など新しい資料も使用し、現行本『孫子』十三篇の構造を再検討し、その編纂過程について考察する。

論文の内容は以下の通りである。第一章「『孫子』の構造と錯簡」では、まず従来の研究を概観するとともに『孫子』の諸テキストについて述べ、実際に『孫子』十三篇の構造を検討する。それによって『孫子』が整備された本ではなく、重複する、あるいは関連がある内容の章が散在し、文・章が篇の内外において移動した可能性があることを述べる。加えて、具体例として行軍篇と地形篇を取り上げ、語や句形の共通性などから移動の可能性を論じる。第二章「『孫子』兵勢篇と「奇正」」および第三章「『孫子』虚実篇考」では第一章で提示した、文・章が編纂過程で移動した可能性があるということを前提に、具体的に兵勢篇・虚実篇に焦点を当ててその構造を再検討する。さらに、第二章では「奇正」、第三章では「虚実」という篇中のキーワードについてその概念を明らかにし、それによって漢簡以前の旧態の推測を試みる。また、第三章では「虚実」の解釈が編纂過程に与えた影響について考える。